

「導線の皮膜をむく」

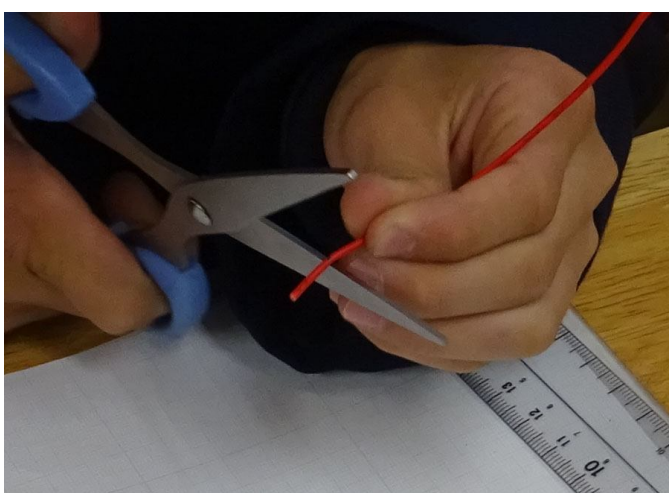
お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

児童用の豆電球の実験キットには、細い皮膜導線がついている。あの導線は子どもが爪でも簡単にむけるタイプだ。私はあれでいいのだろうか？といつも思っている。確かに実験の効率が良いのだが、やはり、しっかりした太い皮膜導線をむかせてみたい。

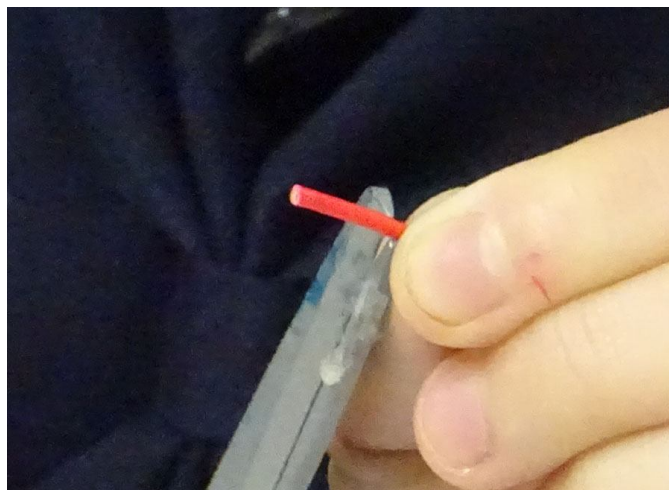
やや太い皮膜導線だと、爪ではむけない。ハサミで皮膜の部分だけに切れ込みを入れる必要がある。私は安全指導をしたあと、一人20cmずつ導線を渡して、はさみだけで挑戦させてみた。



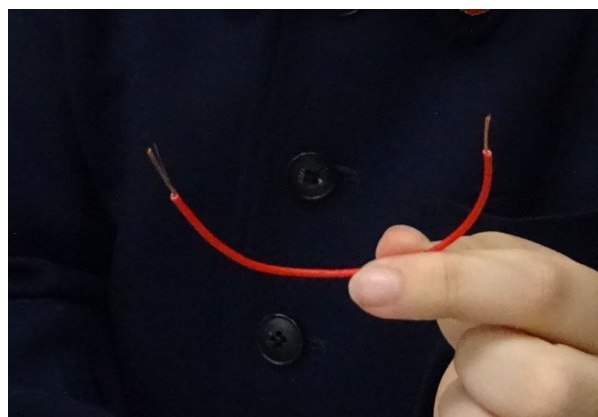
まずは皮膜をむく位置を決める。几帳面な子どもは、ネーム・ペンで丁寧に印をつけている。



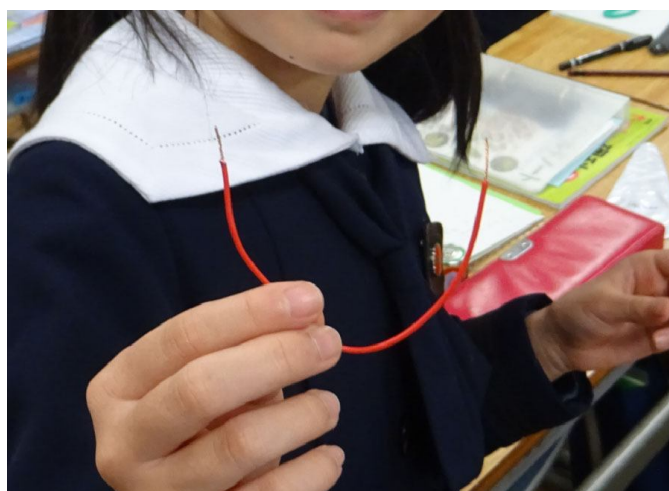
最初は普通にハサミを入れてしまい、金属線ごと切ってしまう。当然、導線はだんだん短くなってゆく。失敗の連続である。教室中から「短くなっちゃー！」とキャーキャー悲鳴があがる。その様子を、私だけが面白がって見ていた。



そのうち、皮膜の片方にだけ切れ込みを入れて、あとは爪でひっぱると、うまくむけることに気づく。こういう「知恵」は、音速よりも速く教室中に伝播するから不思議だ。



それでも、切れ込みが深すぎて、金属線ごと切断してしまう状態が続いた。しかし15分ぐらい試すうちに、やっと両側の皮膜をむけるようになってきた。



単に導線の皮膜をむくというつまらない作業なのだが、子どもたちにとっては初めての体験で、非常に新鮮だったようだ。次々と「先生できました！」見せにくる。基本技能の範疇だが、楽しい活動だった。